

古文書を整理・分類し、その「連続性」に気づく

博物館に展示されている各種史料は、誰かが大切に保存することで現世に伝えたものであり、それを整理する研究者の仕事によってはじめて歴史的な記録として活用できる「史料」となったものです。

そんな「整理される前」の状態の史料に触れる実習が、史学科で行われました。調査の対象となったのは奈良県御所市の旧家に代々伝わっていた古文書。教員・有志の学生たちと奈良県御所市文化財課は、約1,000点にもものぼる膨大な古文書の整理と分類を実施しました。代々伝えられた古文書に触れ、その取り扱いや調査方法を学ぶ貴重な機会です。膨大な史料を読み込んでパターンを理解し、整理することで、その史料が何を伝えようとしたのかが見えてきます。そんな史料の「連続性」を自ら見出すことは、歴史を学ぶ学生にとって有意義な体験です。

調査後、学生たちは古文書が保存されていた旧家を訪問。所蔵者のお話を聞いたり家の中を見学したりと、古の記録を今に伝えた場所の空気を感じることが出来ました。



これまで調査がなされていない貴重な史料に触れることは、学生にとって重要な体験です。歴史研究の基礎となる古文書を整理し、それがどれほど慎重な調査を経て解明されていくのか。文化財の保護と歴史研究の最前線の様子を学びましょう。

文学部 史学科
専門分野/日本文化史
村上 紀夫 教授、博士(文学) MURAKAMI Norio



貴重な古文書に実際に触れ、整理・分類を進めながら読み込む実習。

史学科のフィールド・アクティビティ

- 教育委員会と共同で実施の山添村古文書調査(年2回)
- バスによる日帰り史跡見学会(2022年度は福井県小浜市・明通寺)
- ゼミ単位の宿泊研修(岡山・倉敷など)
- ゼミ主催の史跡・博物館などの見学会(大阪四天王寺・奈良町など)